

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異（二）

内野，優子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8985>

出版情報：文献探究. 40, pp.59-78, 2002-08-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異 (二)

内野優子

本稿は、『文献探究』第三十九号(平成十三年三月)に続く国文学研究資料館蔵 慶安五年刊『訳和和歌集』の翻刻(附校異)であるが、前号においていささか疑問を覚えていた点について、その後の調査で確認し得た範囲のことを先ず報告しておきたい。

問題箇所は、慶安五年刊本にはなく、承応二年刊本に存する、法橋能星の作とされる和歌一首である。(前号では、五十九頁上段に位置する。)これは、「訳和一」の九丁目の後に、「又九」として、丁度、一丁分増補されている部分である。ここで、もう一度その該当箇所を挙げておこう。

此非小縁のころを

法橋能星

朧おぼろけの蛭あまのかつきも宮司みやじも御調みつきはおなし大君のため

同じ文のころを

同作者

おほろけの蛭あまやはかつくいせの海の波高き浦に生るみるめは

はしめのうたの作者さくしやてんざ天竺てんたくにては

附校異 (二)

内野優子

靈山りゆうぜんの地主明神こんひらじん金毘羅神きんぴらじんに仕
へ奉りまうく弥勒みらくと現けんじ漢朝天台山かんとてんたいざん

にては神僧しんそうに仕へたてまつり

竜樹りゅうじゆ菩薩ぼさつと名づく我朝わがにいたり

ては王城わうせいの鎮守ちんしゆ四明しめいの神明しんめいに仕へ

奉り能星のつせいと名づく事これおほろ

けのゑんにはあらずといへりしかるに嗟

峨みかこの帝御誕生たんのうのいのりを日吉ひよしの社やしろに

て執行しゆぎやうし給ふ御願成ごねんじやう就すの時ときよみ給

ふとなりかるかゆへに能星のつせいを下七

社やしろ第一だいいちの宮みやと勸請くわんじやうなし下す今

の小禅師宮ぜんじみやこれなり次の哥うたの心も

大旨おほしはおほろけのゑんにあらずとなり

一 法橋能星について

先ず、法橋能星とは如何なる人物であろうか。和歌の後の注すなわ

ち実海注を見てみると、弥勒 竜樹菩薩 能星 小禪師宮（下七社第一の宮）ということになり、本地垂迹説に基づく伝説めいた人物像が浮かび上がってくる。注の後半部「嵯峨の帝御誕生のいのりを日吉の社に執行し給ふ」、「能星を下七社第一の宮と勸請なし下す今の小禪師宮これなり」の傍線部に着目してみたい。まず、初めに「日吉の社」であるが、これは日吉大社のことであり、長くなるが、『國史大辭典』（吉川弘文館）よりその項を引用する。

ひよしたいしゃ 日吉大社 全国の日吉（日枝）神社・山王社の
 総本社で、大津市坂本本町（比叡山の東麓）に鎮座。比叡山の山
 岳信仰を源流とし、明治維新までは比叡山延暦寺の地主神として
 発展した。社名は、第二次世界大戦前までは日吉神社と称したが、
 現在は宗教法人日吉大社となる。古代は「ひえ」と称したが、中
 世以降は「ひよし」とよばれている。また神仏習合のもとでは、
 中国の天台山国清寺の地主神山王祠になぞらえて、日吉山王社と
 か山王権現などとよばれた。当社は多くの神社群から構成される
 ことも特徴で、比叡山の神として『古事記』上にみえる大山咋
 （おおやまくい）神を祭る二宮（にのみや）と、天智朝に近江大
 津宮の鎮守として大和国の三輪神（大己貴神）を勧請したと考え
 られる大宮との二つの本殿を中心に、上・中・下各七社、計二十
 一社の本社・摂社と多くの末社群とからなり、かつては山王百八
 社と称されていた。天台宗延暦寺の創立とともにその鎮守神とな
 り、二十一社の構成も平安時代末までには成立していたとみられ
 る。： 中略。： 元龜二年（一五七一）の織田信長の比叡山焼
 討ちによって、当社もすべて焼失、戦火の中をようやく出雲国に
 逃れていた神主生源寺行丸が復興に努力し、豊臣氏の援助によつ

て、行丸の死後、慶長三年（一五九八）ごろまでに主要社殿を再
 建した。近世には、江戸城の鎮守が分社の山王社（東京都千代田
 区永田町の日枝神社）であることや、山王一実神道にもとづいて
 東照宮が創建されたことによつて、江戸幕府から特に崇敬をうけ
 た。・・・ 以下省略。
 （岡田精司）

また「下七社第一の宮」、「小禪師」というキーワードについても、
 先に挙げた辞典の、山王二十一社一覽に、

類別	現社名	祭神名	旧称	本地仏
下七社 末社	樹下若宮	玉依彦神	小禪師	竜樹菩薩

と挙げられており、さらに本地仏が「竜樹菩薩」であることも確認で
 きる。

次に、『天台宗全書』^{注2}の日吉関係の典籍から「小禪師」を見ていく
 こととする。

南北朝初期の山王神に関する口伝・口決等を集録した秘伝書である^{注3}
 『金剛秘密山王傳授大事』^{注4}には、小禪師の項に、

龍樹菩薩
 僧形

或彌勒 金剛合掌

と記載され、山王神道の秘伝内容を記した書である『和光同塵利益灌
 頂』^{注5}にも、

小禪子^{注6}

龍樹菩薩。： 中略。：
 或彌勒菩薩。： 以下省略。：

とある。また、比叡山日吉社の上中下七社（二十一社）について、

その由縁をカナ和文で記した『山王略抄』^{注6}では、

一。下七社第一

小禪師八地神^八第四。彦火^{ヒコ}出見^{ホテミ}尊ナリ。其社ヲ十禪師ノ頭二崇ムルユヘニ。小禪師ト號スト云ヘリ。御本地八龍樹トモ或八彌勒トモ云ヘリ

となつていた。

さらに、江戸初期の日吉社の記録で、日吉山王の諸般の事績について、広く古記録・諸典籍を蒐集類聚し編集した書である『日吉山王権現知新記』の異本の一つとされ、三村晃功氏によって紹介された叡山文庫雙巖院本『山王新記』^{日吉和歌}四（江戸初期写^{注7}）には、百八首の日吉山王関係の和歌が集成されているのであるが、その中の「追加」の部分に法橋能星による和歌が二首含まれ、

此読人は、宮司の元祖桓武天皇の時の人、嵯峨天皇御誕生御折、

山王の社にて執行ひ給ひ、御願成就の時、此歌を読むゆへ、法橋に叙し給ふ。能星を十禪師^十の宮と勸請せしむ云々

という記事があるという。

ところがその一方で、叡山における天台宗の故事その他の口伝を集録した『溪嵐拾葉集』^{注8}の「一。於日吉社頭二寶塔湧現ノ事」の部分には、

明達^八龍樹菩薩ノ應迹也。今小禪師是也。

というように、小禪師は明達律師の迹だという説もある。しかしながら、明達は、嵯峨帝よりも後代の僧であるから、年代的にずれが生じてしまうことになる。

以上の資料を見る限り、結局、「小禪師」には諸説あるようで、「法橋能星」の名を明示している資料も、『法花譯和集』と『山王新記』

日吉和歌^四、そして後に触れる『類題法文和歌集注解』^{注10}にとどまる。「能星」という人物の詳細については、未だ良く判らないのが現状である。

二 能星歌について

先に挙げたように、三村氏が紹介された、『山王新記』^{日吉和歌}四の中の「追加」の部分には、「或抄中」の注記をもつ法橋能星の和歌が二首集録されている。

106 三度うけみたび講し言の葉の末の世長くかけて守らむ

108 おぼろけの蜚のかづきも宮司も御調はをなじ大恩^大のため

先ず、106番歌は、他の承応二年刊本より一首多い国文学研究資料館蔵本の承応二年刊『法花訳和集』（五一二首）のうち、まさにその増補された一首に該当する。その箇所は、「訳和四」の囑累品、二十六丁表で、

社司能星

三度うけ三たび讓し言のはの末の代長くかけて守らん

法花経のゆつりを受持し給ふ菩薩の中にも弥勒は

無明法性の二の中道を守りて劫末の後は必出

せし給はんと御誓なりされは歌に作者の

意は三度うけ三たび讓し末の代長く守らんと

云へるは天竺大唐日本迄は三たび也尔あるに此国は

遮那天照縦横の応用印門の地なれば根本神国

の一切衆生の生死の二法を守り給ふ其御化導を

たすけんためにとて都率天上に飛行すと

いへる今の小禅師の宮といはへり

とある。そして、108番歌は、今回問題箇所として初めに掲げた「又九」の部分の初めの歌（但し、108番の第五句目「大恩のため」は「大君のため」となっている。）とほぼ同歌といえそうである。三村氏は、106・108番歌の二首は、目下のところ、出典を見出しえず、新出歌の可能性が高いようだと言われているが、それらの二首が、承応二年刊本の『法花訳和集』、特に国文学研究資料館本には、二首とも集録されている。また、時代は下るが、『類題法文和歌集注解』（畑中盛雄著、寛政二年一七九〇成立）には、108番の歌だけであるが、法橋能星の歌として次のようにある。

此非^二小縁^一

一〇〇 おほろけの蜃のかつきもみやつこもみつきは同じ大君の為

此品偈に及^レ見^ニ諸仏^一此非^ニ小縁^一とあり。下の語に文殊当^レ知四衆竜神^ニ察^ス仁者^一とあり。小縁はおほろけとよむ也。歌の心はおほろけなるあまのかつきの物も又御奴とていやしけなる民のたくはへ物も、みつきとてそなふるは皆大君の御為なり。いはんや仏の御為につかへまつらんは、まことに身をもおしむへからすと^レいふ義にや。蜃は海にあるものゆへ、竜神の海をつかさとするによせていへるにや。此偈に四衆竜神とあればなり。大君を

は世尊法王に比したり。小縁とはいさゝかの事なり。

ここでも、歌の第五句目は「大恩のため」ではなく「大君のため」となっているが、これも日吉和歌と同歌と見てよいだろう。

「ついでに見てみると、日吉和歌の106・108の二首とも集録し、しかも、法橋能星という人物についての記事をも考証している『法花訳和集』と、『山王新記』^四日吉和歌との関連性をつかがい知ることができ

る。『法花訳和集』に法橋能星の歌が増補されたのは、承応二年頃、或いは後年増補が行われた当時の日吉神道の隆盛ぶりを反映したものであるうか。

さて、次に問題箇所「又九」の二首目の歌に関しては、『古今和歌六帖』の第三「みるめ」を詠んだ歌群中に見られる。『新編国歌大観』から引用する。

一八六八 おぼろけのあまやはかづくいせのうみの

なみたかきつらに生ふるみるめは

又、他に『伊勢集』にも、

人のいひたりし

四六〇 伊勢のうみにあそぶあまともなりにし

なみたかきわけてみるめかづかむ

かへし

四六一 おぼろけのあまやはかづくいせのうみの

なみたかきわけてみるめは

とある。『新編国歌大観』の『伊勢集』は、西本願寺本が底本で、「なみたかきつらに」が「なみたかきそに」となっているが、歌仙歌集本及び群書類従本は、「波高き浦に」である。

さらに、『後撰和歌集』巻第十三には、次のように、

題しらず

在原業平朝臣

八九一 伊勢の海に遊ぶあまともなりにし

浪かきわけてみるめかづかむ

返し

伊勢

八九二 おぼろけのあまやはかづくいせの海の

浪高き浦におふるみるめは

と、「恋」の部立に入集されている。贈答歌であるが、業平と伊勢とでは時代が合わないので、八九一番の歌は、「なりひら」ではなく、「なかひら」の歌であるというのが、現在の一般的な解釈である。

これらの歌に見られる「みるめ」（海松布）については、片桐洋一氏の『歌枕歌ことは辞典増訂版』（一九九九年・笠間書院）によると、「和歌によまれる場合は、ほとんどは『見る目』（男女が相手と逢う機会）と掛けてよまれた。」とある。まさに、そのような男女の贈答歌である伊勢の歌は、ある程度世に知られていたはずである。それが何故、『法花訳和集』の中に、しかも法橋能星の歌として集録されたのか、甚だ疑問である。

そもそも、『訳和集』の著者である実海が、能星作とされた歌を知っていた可能性は低いと思われる。しかし、後人による増補だとしても、先の疑問は残されたままである。増補した人物は、どういう意図のもとで、この歌を能星作として法華経歌集の中に加えたのか、興味はつきないが、今のところその答えは見出し得ていない。今後の研究課題としたい。

注

注1 前号において、翻刻ミスがありました。初めの和歌の第一句目「靡けに」は「靡けの」、さらに和歌の注の部分で九行目「帝は」は「帝」の誤りでした。お詫びをもって訂正いたします。

注2 『天台宗全書 第十二巻』（昭和十一年・天台宗典刊行會編・大蔵出版株式會社）を参照。

注3 『正續天台宗全書 目錄解題』（平成十二年・天台宗典編纂所編・春秋社）に依る。以下の『和光同慶利益灌頂』、『山王略抄』、『日吉山王権現知新

記』についても同じ。

注4 『天台宗全書 第十二巻 三四頁上段より引用。』

注5 『同右』一八六頁下段より引用。

注6 『同右』一三三九頁下段より引用。

注7 『叢山の和歌と説話』（一九九一年・新井栄蔵 他編・世界思想社）所収「日吉山王和歌の世界——覚深撰『山王知新記』の紹介」

注8 『大蔵経全解説大事典』（平成一〇年・鎌田茂雄、河村孝照 等編・雄山閣出版）に依る。

注9 『大正新修大蔵経』（一九三一年・高橋順次郎編・大蔵出版）七六巻八六

五頁下段より引用。

注10 塚田晃信編『類題法文和歌集注解 一』（昭和六〇年・古典文庫）一〇五

頁より引用。

付記 以上の報告をなすに当たり、天台宗典編纂所の藤平寛田氏に

は、三村晃功氏の御論文の紹介や、『溪風拾葉集』の「小禪師」説について、御教示を賜った。ここに付して深謝申し上げます。次第である。

三 翻刻

今回は、通し番号でいうと、71番歌から160番歌までの翻刻となった。凡例については、『文献探究』第三十九号の四十九頁下段を参照されたい。

また、前号の刊行後、室町後期写とみられる、日本大学総合学術センター所蔵『訳和和歌集』の翻刻が、辻勝美氏、那須陽一郎氏によって行われた（『語文』第百十一輯・平成十三年十二月、第百十二輯・平成十四年三月・日本大学国文学会）。これは、書写年代が古く、今

後の『訳和集』研究の上で、欠かせない資料の一本となるであろうが、総歌数二六四首で、惜しくも下巻を欠く。

報如是のこころをよみ侍りける (二一・オ・五行目)

後京極

71 過ぎける世々にや罪をかさねけむむくひかなしき昨日今日哉

【校異】 (二一・オ) のこころをよみ侍りける・ナシ「内」、後京極・

後京極撰政太政大臣「内」、過ぎける・過ぎにける「承」

定家

72 知ぬ世を思ふもつらし目の前に又なけきつむ後の煙よ

【校異】 (二一・オ) 定家・前中納言定家「内」、つらし・つらき「承」、

よ・に「内」

為尹

73 此世にて人の心になははやくひあればそあまり物憂

(二一・ウ)

始とすゑの哥とは過し世の罪をいま目の

まへのつらきにしり侍り中なる現在にあし

き事をなし侍らじもしあしからは来世に

ほのおとなるへしと也

【校異】 (二一・オ) 為尹・前大納言為尹「内」、(二一・ウ) 過し・

過にし「内」、いま・今の「内」、しり・ナシ「内」、中なる

は・中なる哥は「内」、あしからは・あしからん「内」、ほの

お・ほのを「内」

入道前関白の家に十如是の哥よませ侍

りけるに報如是のこころを

一条院讃岐

74 うきも猶むかしのゆへと思はずはいかに此世を恨はてまし

現在のうきをもつて過去の罪をくへておもひ

なくさみ侍るよし也

(二一・オ)

【校異】 (二一・ウ) 前・ナシ「内」、けるに・ける中に「内」、報

如是のこころを・如是報「内」、集付ナシ・新古「内」、く

へて・くめて「内」、(二一・オ) 侍るよし也・侍るかしこく

そみえ侍る「内」

本末究竟等のこころを

後京極

75 すゑの露もとの雫をひとつそと思ひ出ても袖はぬれけり

【校異】 (二一・オ) のこころを・ナシ「内」、後京極・後京極撰政

太政大臣「内」、集付ナシ・続後拾「内」、出ても・はて、

も「承」

定家

76 浅茅生やまじる蓬のすゑ葉までもとの心にかはりやはする

【校異】 (二一・オ) 集付ナシ・続拾「内」、心に・心の「承」、蓬

の・蓬か「内」

為尹

77 草の原葉のほる露をやかて又雫にみせて月落にけり

【校異】 (二一・オ) 為尹・前大納言為尹「内」

藤原有家朝臣

78 浅茅生や嵐まつまのすゑの露つぬにはそれももとの雫を

【校異】 (二一・オ) 藤原有家朝臣・ナシ「内」、集付ナシ・続古「内」、

生や嵐・原嵐「内」はら風を「承」、まつ・吹「内」、雫を・

雫そ「承」

寂然法師

(二一・ウ)

79 小篠原あるかなきの一ふしにもとの末葉もかはらさりけり

五首ともかはる事なし本末究竟等と

は始の相如是を本として終の報如是を末

としてはしめをはりひとしくして替すと

いふ事にて侍れはあるひは違によせあるひ

はをさになぞらへて申侍れとも露の姿のかは

らぬよし也凡この十如是と申は地獄鬼畜

乃至菩薩仏の十界の衆生一として十

如是を具足せぬは侍らぬもの也

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ・新勅「内」、もとの・本も「内」もと

も「承」、かはる・心かわる「内」、始・初「内」、として・

とし「内」、として・とし其「内」、替す・かわらす「内」、

なぞらへて・さすらへて「内」、姿の・すかた「内」、かは

らぬ・かわらぬ「内」、鬼畜・餓鬼「内」、

止不須説のころを (二三・オ)

前大僧正慈鎮

80 やめくととめしかともつるになを宣奉勅も請にこそすれ

もろくの大声聞の中に舍利弗すゝみ出て

かゝる難解難入の法を説給へと三度請し

奉るといへともをしとめてもだせてわたらせ

給ひしかともつるには五千上慢退て後ひ

ろく開三頭一し給ふ事を宣奉勅とはいふ

なり宣奉勅は法皇の勅といふ心なり

【校異】 (二三・オ) のころを・ナシ「内」、すれ・よれ「内」、法

・御法「内」、をしとめて・おしとめたまひて「内」、も

だせてわたらせ給ひしかとも・またし給ひしかとも「内」、退て・

しりそきて「内」、宣奉勅は・宣奉勅とは「内」、法皇・法

王「内」、勅・勅言「内」、

五千人等即從座起礼仏而退の文を

81 その御のり心にいひて出にしはえぬをえたると思ふ人のみ

増上慢とはえぬをえたりとおもひ証せざるを

証したりと思ふ也かゝる心あしきたくひ五

千人侍りきかれらふかき御のりをき侍らは

かへつて邪見にをつへければ彼たくひに憚て

説ことをいそぎ給はねとも五千人席を巻け

れはあきらかに説給ふ也

【校異】 (二三・オ) の文を・ナシ「内」、(二三・ウ) えたる・えたり

「内」、証せざるを・証せぬ理を「内」、侍らは・奉らは「内」、

かへつて・かへりて「内」、をつ・おつ「内」、席を・席を

を「内」、説給ふ也・とき給し也「内」、

出ニ現於世のころをよめりける

82 いまそしる野へに咲へきはちすはを照さんとてや山の端の月

山の端の月は仏の世に出給へるにたとへたりはち

す葉を照すと侍るはもろくの御弟子の胸の (二四・オ)

はちすの事なり但野への蓮といへる心えかた

しもし高原蓮生といふはかたきためしな

れは仏になりかたき人をなし給へるといふ心

か又筆のあやまりかたつぬへし

【校異】 (二三・ウ) のころをよめりける・ナシ「内」、(二四・オ)

高原蓮生・高原に蓮の生ずる「内」、給へる・給へり「内」、

開「仏知見」といふころをよみ侍りける

83 世に出て仏のみちをひらく人はもとの心のとをるなりけり

仏知見と申せとも本来人具足し侍らすといふ事なししかればもとの心のとをると申なり

【校異】 (二四・オ) といふころをよみ侍りける・ナシ「内」、ひら

く・きく「内」、いふ事なし・申ことなし「内」

前大納言為家日吉の社にして八講おこなひ

侍りける時人々に一品経すゝめ侍りけるに方 (二四・ウ)

便品のころをよみ給ひける

花山院入道前太政大臣

84 いく度か又世にいてし秋の月あまねき影は人ももらさず

おなし月のよろつ世の秋にもかはらず照し給

へるを一仏の世々に出給ふにたとへてよめり十

方三世の諸仏名をかへ時をかへて出給ふと申

もまことにはたゝ釈迦一仏の反作と申心なり

【校異】 (二四・オ) 日吉の社にして・日吉社にて「内」、おこなひ・を

こなひ「内」、(二四・ウ) すゝめ侍りけるに・すゝめしに「内」、

のころをよみ給ひける・ナシ「内」、前太政大臣・前関白太政

大臣「内」、集付ナシ・新拾「内」、一仏・仏「内」、世々・

世「内」、申も・申世「内」、尺迦・釈迦「内」、反・返「内」

前大納言行成

85 世の中にいてといてます仏をはたゝひとことの為としらすや

諸仏の世に出給ふことみな一大事の因縁に (二五・オ)

よれりその大事の因縁といへるは法花経を

説て衆生をみな仏道にいれ給ふ事なり

【校異】 (二四・ウ) 前大納言・権大納言「内」、しらすや・しらすなん

「内」承、(二五・オ) こと・ナシ「内」、法花経・法花「内」、

衆生・一切衆生「内」

無^{ナク}二亦無^{モマケナシ}三のころを

僧都源信

86 妙法のたゝひとつのみ有ければふたつともなく又三もなし

【校異】 (二五・オ) 僧都・権少僧都「内」、ふたつともなく・又二な

く「内」又ふたつなし「承」、三もなし・三もなく「内」、和歌

ノ注ナシ・法花経あらわれぬれば三乗も二乗も皆一乗の妙法と

あらはれて同一道味なる事を無二亦無三とは申侍るなり「内」

唯有^{タテアリ}二一乘^{セウノホウワニ}法^{ホウ}のころを

前大僧正慈鎮

87 いくにかわかのりならぬ法やあると空吹風にとへとこたへぬ

わか法とは慈鎮和尚は天台座主にてわたら

せ給へは法花経の事をさしていへりされは (二五・ウ)

空しく風にとふといへるは下の文に如風於雲

中一切無障碍といつて風はとゝこをりなき

ものなれはいつれの国にか法花経の外の句は

有やとへとこたへ侍らぬとはなきよといふよし也

【校異】 (二五・オ) いくにか・いくにも「承」、こたへぬ・こた

へす「内」、(二五・ウ) されは・きて「内」、風にとふといへ

るは・風とは「内」、障碍・障碍上「内」、いつて・いひて

「内」、とゝこをり・とゝこほり「内」、法花経・法花「内」、

句・法「内」、とへと・とふに「内」

88 いつかたにのこさず行てたつめとも花は御のりの花はかりこそ

おなし文をよめり心あらはなり

【校異】 (二五・ウ) いつかたに・いつ方を「内」いつかたも「承」

如^ニ我昔所願^ニ今者已満足^ニの心をよめり

89 勝鹿かつしかや法のみちにそ渡しけるむかし思ひしまゝのつき橋

もろくの声こゑ聞きたちいにしへ大通たうつう仏と申せし

仏のみもとにして今の釈迦しやくかほとけいまた (二六・オ)

菩薩ぼさつにてわたらせ給ひしに結縁けちえんしそめ

侍りそのときかれらをわかごとく菩薩ぼさつのく

らみにいれんと誓ちかひ給ひし事のごとくくみ

て給へは釈しやく尊そん化け導だうの満まんする事をよるこひ

給ふなり

【校異】 (二五・ウ) の心をよめり・ナシ「内」、勝鹿かつしか・高飾かうしやく「内」、

たち・たちは「内」、大通たうつう仏・大通智勝たうつうちやく勝かつ勝かつ「内」、(二六・オ)

にして・にて「内」、ほとけ・仏の「内」、侍り・侍りき「内」、

みて給へは・かなひて侍れば「内」、釈尊しやくそん・釈迦しやくか「内」、

諸法しよほふ従じゆん本ほん来らい常じやう自じ寂滅じやくめつ相さう仏ぶつ子し行ぎやう道だう已い来らい世せ得とく

90 昔むかしよりこゝろのとかに行舟ぎやうしゆんはまとひし浪なみの末すえをしそ思おもふ

諸法しよほふもとよりこのかた寂滅じやくめつの相さうなるはこゝろ

のとかに舟ふねのゆくごとく仏ぶつ子し行ぎやう道だう已い来らい世せ得とく (二六・ウ)

作ま仏ぶつはまとひし浪なみのすゑをしそ思おもふとな

りこの文ぶんにさまくの口伝くでんあり

【校異】 (二六・オ) 諸法しよほふ侍りける・此間こゝろ説法しやくほふ従じゆん本ほん来らい經ぎやう文ぶん有あへ

き上かみ「内」、まとひし浪なみ・まよひし波なみ「内」、(二六・ウ) 舟ふねの

ゆくごとく・行舟ぎやうしゆんのごとし「内」、浪なみ・波なみ「内」、さまくの・

若わか有あ「内」、聞き法ほふ者しやく無む「一」不ふ成じやう仏ぶつ「のこゝろを

91 こえてみな仏ぶつのみちに入いなみはこののりを聞きすゑの松山しょうざん

このほけ経けいをぎ奉ほうりて後は仏道ぶつだうにいら

すといふ事ことなければといへる心こゝろあきらか也

但ただこえてなとといへるは聞き法ほふのうへに修行しゆぎやう

の功こうを積たてて仏道ぶつだうに入いへきを修行しゆぎやうの功こうをから

すして凡ぼん夫ぶ地ちより直ちかに如來にょらい地ちにいたるへしと也

【校異】 (二六・ウ) のこゝろを・ナシ「内」、こえてなと・越こてみ

なと「内」、いへるは・いへる「内」、入いへき・入いぬへき「内」、

いたるへし・至いたりぬへし「内」、

難波なんぱかたふかき江えよりそなかれけるまことをしるは水みづ茎かきの跡あと

真如しんにょ美相びさうのごとはりをさして無性むじやうといへり

此理こゝろは仏ぶつのみしろしめせりかるかゆへにふかき

江えとはいふ也なりさして無性むじやうとは有あとも無むとも一法いつぽう

にをち侍まらぬところの理ことなりしかれとも縁えんにひ

かれて善ぜんともおこり悪あく共ともなれり此こゝろとき仏ぶつは

出い給でひて三乗さんじやうを前まへにし一乗いつじやうを後あとにとき給

よしなり

【校異】 (二七・オ) のこゝろ説しやく侍りける・ナシ「内」、かるかゆへに・

故ゆゑに「内」、有あとも無むとも・ありともなしとも「内」、をち・

おち「内」、善ぜんともおこり・善ぜんとも「内」、前まへにし・さきにし

漸しぜんく積たつ功徳こうとく「のこゝろをよみ侍りける (二七・ウ)

法眼ほふがん親おん類るい

93 黒染くろぞんの袖そでにもふかく移うつりけりおりくなる花はなの匂におひは

おりくつめる花はなの袖そでにしみぬるにて漸しぜんくのと

いへる詞をもたせ侍り

【校異】 (二七・ウ) のころをよみ侍りける・ナシ「内」、なるゝ・

つめる「内」、花の・花の香の「内」
若人散乱一心乃至以「一」花「供」養於画像「漸
見」無数仏「の文のころを讀侍りける

法印頼舜

94 ひとふさを折て手向る花のえに覺きざひらくる身とそ成へき

【校異】 (二七・ウ) の文のころを讀侍りける・ナシ「内」、集付ナ

シ・玉葉「内」

前大僧正慈鎮

95 をしけれとひと枝おらむ桜花さては仏のたねとなるへき

(二八・オ)

【校異】 (二八・オ) をし・おし「内」、さては・さてそ「内」「承」、和

歌の注ナシ・前首文の心になへりあきらけし「内」

藤原秀茂

96 うすくこき御法の花の色はみなひとつ蓮の身とそ成ぬる

手折花の色香はさまくなれとも仏道の

ひとつ蓮となるよしなり

【校異】 (二八・オ) 秀茂・秀義「内」、集付ナシ・新統古今「内」、

色香・香「内」

方便品のころを讀侍りける

藤原家隆

97 玉銚やゆく手にまよふすさひにもおかめは仏みちひき給ふ
或有入礼一拜或復但合掌乃至拳「一」手「或復
少低」頭この文の心を讀りあらは也とみえたり

【校異】 (二八・オ) 讀侍りける・ナシ「内」、藤原家隆・家隆卿「内」、

や・の「内」、少・小「内」、とみえたり・ナシ「内」
是法住「法位」世間相常住の心を讀侍りける

了然上人 (二八・ウ)

98 いにしへにかはる色こそなかりけれ植しまゝなる軒の梅かえ

【校異】 (二八・ウ) 讀侍りける・ナシ「内」

素性法師

99 世中のつねとはみれと秋のゝのうつろひかはる時そわひしき

【校異】 (二八・ウ) つねとはみれと・常にてみれば「内」

前大僧正慈鎮

100 あらたまることも渚による玉をかけてあらはず君か御代哉

万物みな真如の变化なり是法住法位と

いへる是なり世間相常住とは花は散ぬれ共

そのまゝにしてとまる事なく又春をむかへ

て咲ならひなりうつろひかはるありさまな (二九・オ)

から常住ふ滅なり後の哥に君か御代といへる

は仏のかく説給へるを申なり

【校異】 (二八・ウ) 渚による・緒にのみよる「内」、玉・波「承」、

代・世「内」、真如の・真如理の「内」、变化・返作「内」、

そのまゝにして・其散まゝにて「内」、なく・なし「内」、(二九・

オ) 滅・異「内」、御代・代「内」

深著「於五欲」如「牛愛」二「尾」のころを

俊成

101 高砂の尾上の桜みし事もおもへはかなし色にめてけり

【校異】 (二九・オ) 如「牛愛」一「尾」如「牛愛」レ「尾」承、俊成・皇

太后宮大夫俊成「内」、事も・ことに「承」かなし・うれし「承」

西行法師

102 こりもせすつき世のやみにまよふ哉身を思はぬは心なりけり

犛牛みぎうといへるうしは尾おのいつくしきものなり

尾おゆへに身をほろほす事を衆生の貪とん

愛あいにひかれて悪趣あくしゆにおつるにたとふるなり (二一九・ウ)

誠まことにわれも人も心をしたがへ侍らぬかゝる後

世はいふにおよはず現世げんぜにもくるしみの海うみ

にしつみ侍るなり

【校異】(二一九・オ) 法師・法印「内」、犛牛みぎう・犛「内」、いつくしき・

つづくしき「内」、ほろほす事・うしなひ侍る事「内」、
無量無数劫むりやうむすうしやく聞きこ二是法ぜはふ亦難またたがひといふころを

家隆

103 いく代ふと松のみとりの花のえに又聞かたき鶯のこゑ

松の花はちとせにひと度いちど咲さものなればま

れなる事のたとへなり況いはや花は見侍り

しかも又鶯の声をきゝ侍らん事かたしとなり

【校異】(二一九・ウ) といふころを・ナシ「内」、家隆・家隆卿「内」、

松のみとり・まれのみり「承」、況いはや・いはんや一度「内」、

花は・花を「内」、 俊成 (二二〇・オ)

104 はかりなく数なき世々を過してもひと度きくはかたき御法を

【校異】(三〇・オ) 俊成・皇太后宮大夫俊成「内」、 過しても・つづくし

ても「承」、 御法を・法也「承」

大僧正慈鎮

105 法の道にあふうれしさを岩つゝしかたくも色に出にける哉

【校異】(三〇・オ) 大僧正・前大僧正「内」

(三〇・ウ) 白紙

訳和歌集二 (訳和二・一・オ)

第二卷譬喩品

文和九年十一月花園院七年の御仏事

法皇の御沙汰にて法花経の料幣れうしに同経

の品々の要文を題にて人々によませたまひ

けるに譬喩品の今日乃知真是仏子の文を

読侍りける 入道親王覚誉

106 今そきく鹿なく野へに霧はれてもとこし道もへたてなしとは

いまきくとは法花経ほっけ聴き聞きこして舍利せり弗ふつが領解

したるよし也鹿なく野へに霧のはるゝとは

鹿野園ろくやえんと申せし所にて始て如来小乗ぶつぜんじやうの法 (一・ウ)

を説とくめ給たまひしときかつく煩惱ぼんなんをのそぎけ

るをいへりもとこしみちは小乗せうじやうの道なりい

ま小乗の道すなはち広大一乗の道とふた

つなしと説ゆへなり

【校異】(一・オ) 訳和歌集二・ナシ「内」法花訳和集二「承」、第二

卷譬喩品・第二卷「内」、九年・三年「内」「承」、要文を・要

文ともを「内」、よませ・哥よませ「内」、たまひける・給ふ

ける「内」、の文を讀侍りける・の心を「内」、野へに・野へ

は「内」、もとこし・えこし「内」、法花経ほっけ・法花経を「内」、

野へに・野へは「内」、(一・ウ) 鹿野園ろくやえん・鹿野花ろくやえん「内」、

如来・如来の「内」、のそぎけるを・除きしを「内」、みちは・

道とは「内」、
号「花光如来」といふころをよめりける

俊成

107 行末の花のひかりの名をきくに兼てそ春にあふ心ちする

舍利弗来世に仏にならせ給ふとき名をは

花光仏と申せしなり

【校異】 (二・ウ) よめりける・ナシ「内」、 俊成・皇太后宮大夫俊成

「内」、 舍利弗・舍利弗の「内」、 申せしなり・申なり彼ごとく

我も又此経に結縁し侍ればつるに仏に成侍らん心うれしさを兼て

春にあふとはいへり春は花の時なればなり「内」

我等亦如是必当得作レ仏の文の心を (二・オ)

前大僧正慈鎮

108 たかき嶺にさきたつ人を見るからに我も行へき道をしる哉

この文は天竜八部衆舍利弗成 仏の記をえ

侍るを見てわれらもまたかくのごとく仏にな

り侍らんと悦て申詞なり

【校異】 (二・オ) 如是「承」、 の文の心を・ナシ「内」、

え侍る・見侍「内」、 なり侍らん・成ぬらん「内」、 悦て・悦

侍りて「内」

不覺不驚不怖の心を読侍りける

慶政上人

109 おとろかてけふもむなしく暮ぬなり哀つき身のいり会の鐘

三界はくるしみのさかむなる所なれともわれら

こときものはかへつて是をたのしみとおもひ (二・ウ)

侍り仏常にこれをみそなはしてかなしみ給ふ

よしなり

【校異】 (二・オ) の心を読侍りける・ナシ「内」、 集付ナシ・風雅

「内」、 鐘・空「内」承、 さかむ・さかり「内」、 (二・ウ)

かへつて・かへりて「内」、 たのしみとおもひ・たのしみ思ひ

110 「内」、 仏常に・仏は「内」、 みそなはして・みなわして「内」

贈従三位為子みまかりて後読をき侍り

ける哥のうらを翻して法花経みつからか

きて巻くのころを表紙の絵にかゝせ

侍りけるに此巻のころを

民部卿為藤

110 いつまてかわか身ひとつの出かてにふる郷かすむ月をみるへき

三界火宅をふる郷とせりかゝるあさましきふる

里をはいつかはなるへしと也出かてとはつきなり (三・オ)

かすむ月とははるかにへたてたる心なり

【校異】 (二・ウ) をき侍り・置て侍り「内」、 こころを・心をよみて

「内」、 此巻・二巻「内」、 (三・オ) へしと也・へきとなり

「内」、 出かてとはつきなり・出かては出かたきなり「内」

母の周忌に法花経をみつから書て巻く

の心をよみて表紙の絵にかゝせ給ひける

に二巻の心を 定家

111 をしましよあけほの霞む花の陰これも思ひのしたのふる郷

春のあけほのゝ花の陰に貪著し侍るもたゝ

おもひの家をは出やらずとなけくよし也

【校異】 (三・オ) 給ひ・ナシ「内」、 定家・前中納言定家「内」、 を

しましよ・おしますよ「内」をしますよ「承」、 おもひの・思ひ

也「内」、 家をは出やらずとなけくよし也・ナシ「内」、 111番歌

ト112番歌ノ間ニ、 119番歌ト120番歌

猶如二火宅」のころを讀給ひける

大僧正慈鎮

112 まよひゆくつき世中にもゆる火をふる郷とのみ思ひける哉

【校異】 (三・オ) 大僧正・前大僧正「内」、(三・ウ) 火を・火は「内」
譬喩品の心を読侍りける

近衛院御製

113 わかこゝろ三の車にかけつるはおもひの家をつしとなりけり

【校異】 (三・ウ) 読侍りける・ナシ「内」、集付ナシ・続千「内」
花山院前内大臣

114 めくりきて猶ふる郷の出かてにさそふもつれし三の車を

【校異】 (三・ウ) 集付ナシ・新拾遺「内」
前大納言為氏みまかりける仏事のつゐて
に一品経の哥よみ侍りけるに譬喩品を

平宣時朝臣

115 を車ののりををしえを頼すはつき世にめくる身とやならまし

【校異】 (三・ウ) 譬喩品を・譬喩品の心を「内」、集付ナシ・玉葉
「内」、をしへ・おしへ「内」、うき・猶「内」なを「承」
乗「是宝車」のこゝろを讀侍りける (四・オ)
前大僧正慈鎮

116 今そしる三の車にのりの道は門より外にありけるものを

【校異】 (四・オ) のこゝろを讀侍りける・ナシ「内」、三の・けふの
「内」今日の「承」
瑞雲院贈左大臣遠忌に法花経の料紙
のために品々の哥崇賢門院すゝめさせ
給ひけるに譬喩品の心を讀侍りける

入道一品親王永助

117 とにかくに三の車のわかれてもひとつ道にやめぐりあふらん

【校異】 (四・オ) 崇・宗「内」、読侍りける・ナシ「内」、集付ナシ・
新続古今「内」、117番歌ト118番歌ノ間ニ1首・僧上道瑜 小車
のをのかさまく出しかと二道にてめぐりあひぬる「内」
前大僧正道瑜

118 こゝろをは三の車にかけしかとひとつそ法のためしにはひく

【校異】 (四・オ) 前大僧正道瑜・権僧正永縁「内」「承」、かけ・出
等一大車のこゝろを讀給ひける
「内」
大僧正慈鎮 (四・ウ)

119 うしやさはかゝる車のありとしらてのらはやとたに思はさり劔

この品を譬喩品と名づくる事はたとへは長者
ありその家又とめり此長者に卅人の子五百
人の子あり此家忽然として大火いきて侍り
これらの子おさなぶして火におちいらむ事
をもしらすかるかゆへに父の長者方便して
火宅の難をのかれしめむかためにこゝにおる
て長者たはかり給ふやう門外に羊鹿牛の
三の車よにいつくしきもてあそひものなりい
そき出でとるへしと此をしえをうけてあら
そひはしり出でみれば大宅みな火のため
にやかれぬ其後かの諸子長者に對し奉り
て門内にして約束し給ひし三の車をたへ
と請侍りけるに長者もとより火宅の難
をのかれしめむかための方便なれば本意にま
かせて七宝にてかさりたてたる大白牛車を

あたへ給へりこのとき三の車も大白牛車の外にはなかりけり所望に過たりとて諸子よろこびあへり彼三十人の子といふは声聞等の三乗の人五百人と申は五道の衆生にて侍る也此心をえてみ給は、此品のこゝろはやすくしり給ふへし

【校異】 (四・ウ) 等一大車、大僧正慈鎮・ナシ「内」、車の車を

「内」、劔・けり「内」「承」、長者・大長者「内」、いらむ・いらん「内」、父の・父「内」、かために・とす「内」、(五・オ) 三の車・三の車あり「内」、いつくしき・うつくしき「内」、

とるへしと・これをとるへしと云「内」、をしへ・おしへ「内」、大宅・火宅「内」、長者・長者は「内」、しめむ・しめん

「内」、まかせて・まかせて引ちかへ「内」、(五・ウ) 声聞等・声聞縁覚善「内」、此心・此意「内」、119番歌 111番歌ト112

番歌ノ間ニ有リ「内」
得未曾有「非」本所「望」の心を読侍りける

法印房観

120 兼てわか思ひしよりも吉野山猶たちまさる花のしら雲
三の車のいやしきをもとめしに過たる大白牛車
をあたへ給へるを花によそへてかくいへり

【校異】 (五・ウ) の心を読侍りける・ナシ「内」、120番歌・此間

哥并注落タリ「内」、三のいへり・ナシ「内」、法印房観ノ次ノ行ニ の家をは出やらすと歎よし也「内」、以下ノ文ハ111

番歌ノ注ノ最終行ニアタル部分カ 118番歌ノ後ニ、等一大車 前大僧正慈鎮 かねてわか思ひしよりも吉野山猶立まさる花のしら雲 三の車のいやしきをもとめしにすぐれたる大白牛車をあ

たへ給へるを花によせてかくよめり「内」
以二仏教門一出三界苦「のこゝろを

俊成 (六・オ)

121 谷川や三の淵にやつつまゝ山路の月のをくらさりせは

ほとけのをしへ給はずは三界のくるしみの淵

にしつみはつへしと也

【校異】 (六・オ) 俊成・皇太后宮大夫俊成「内」、川・河「内」、淵・

潭「内」、をしへ・おしへ「内」

今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子の文のこゝろを

122 子を思ふ道こそ聞はうれしけれ心のやみはさとりはる也

【校異】 (六・オ) の文のこゝろを・ナシ「内」、やみは・闇も「内」や

みも「承」

123 みなし子となに思ひけむ世中にかゝる御法のありける物を

【校異】 ナシ

家隆

124 うき世とて身はみなし子となりはてぬわれまとはすな法のたらちね

三界五道の衆生はみな尺尊の御子とき (六・ウ)

給へはかくよめり

【校異】 (六・オ) 家隆・藤原家隆卿「内」、とて・にて「承」、まと

はすな・まよはすな「承」、(六・ウ) 尺尊・釈迦仏「内」、よめり・よみしなり「内」

前大僧正慈鎮

125 たらちねのすみかやいつく我子そと聞に心のゆくかひそなき

悉是吾子との給へとも仏滅度し給ひて

後は凡見の霧へたゞりて見奉らすたま

くゆくといへとも身のいたる事なきをはいかゝ
せむとなげくよし也

【校異】 (六・ウ) いくく・いつこ「内」、ゆく・心は行「内」、せむ・せん「内」

大納言公任

126

子を思ふ親のをしえのなかりせはかりのやとりにまよひはてまし

【校異】 (六・ウ) 大納言・前大僧正「内」、公任・経信「内」経任「承」、をしえ・おしへ「内」

諸苦所^{モロクノクノトコロ}因貪欲^レ為^レ本^{モト}のころを (七・オ)

127

心からざりゆく道のくるしきは嶺の花まで思ふなりけり

衆生はなに事も我心のまよひからよるつもの
くるしみもとめぬにきたり侍り花をむさぶる
心ふかゝらすはかゝるけはしき山路にもまよ
はしとなり

【校異】 (七・オ) 因・同「内」、慈鎮・前大僧正慈鎮「内」、ざりゆ

く・こえゆく「承」、ふかゝらす・ふかゝらす「内」

信解品^{シンゲホウ} 譬^{タトヘハトシホシノヨクチニテムシキルカ}如^ニ童子幼稚無識^ニの心を読侍りける

法印定為

128

しらてこそ結びをぎけむあけまきのいとけなかりし程の契を

仏のをしえをふかく信解^{しんげ}し侍らぬをみとり子
にたとふるなるへし

【校異】 (七・オ) の心を読侍りける・ナシ「内」、(七・ウ) 集付ナシ・

繞千「内」、けむ・けれ「内」、たとふるなるへし・たとへ侍^ル

周^{シユウ}「流諸国」^{リウシュクニ} 五十余年^{ゴジュウニシヨクニ}のころを

神祇伯頭仲

129

あくかるゝ身のはかなさはもよとせのなかは過ても思ひしらるゝ

【校異】 (七・ウ) のころを・ナシ「内」、過ても・過てそ「内」承、
129番歌ト130番歌ノ間ニ1首・僧正光忠
かへりても入そわつらふ棋の戸をまよひ出にし心ならひに「内」

藤原親盛

130

哀にそ忘れはてける五十年あまりひなにやつれし姿なれ共

【校異】 (七・ウ) 集付ナシ・続古 はて・ざり「内」承、五十年・
五十一「内」

崇徳院御製

131

かそふれはとをちの里にとろへて五十年あまりの年そへにける

【校異】 (七・ウ) 集付ナシ・遺風「内」、をとろへて・おとろへて「内」、
五十年・五十一「内」、年そへにける・年もへにけり「内」
式部大夫広範 (八・オ)

132

今そみる五十年あまりの春をへてわかれしまゝのふる郷の空

【校異】 (八・オ) 大夫・太夫「内」、集付ナシ・風雅「内」、今そ・
けふそ「内」、五十年・五十一「内」、空・はな「内」
前大納言尊氏

133

五十年までまよひぎにけるはかなさよたゝかり染の草の庵に

【校異】 (八・オ) 前大納言尊氏・前大納言「内」、五十年・五十一「内」、
染・初「内」、庵に・庵を「内」
伏見院かくれ給ひて後人ニ一品経かき侍り

けるに信解品をかきて読侍りけるに

入道二品親王尊円

われそつき五十年あまりの年ふともめぐり逢へき別ならねは

是は迦葉尊者又我まよひこしかたを譬をも

つて領解せしなり譬は長者あり 子いと

けなくして父をそむけて本国を逃さりて他

國に住居し侍り父も慈悲のあまりにわか

すみ家を出て次第く彼子をつつねみ

たりしに忽然としてその子長者の門のほ

とりにいたりぬ父はわか子とおもへとも子は父とは

しらすたゝ國王などのやうに高き人なれば

こゝもとにやすらいする処はなくしてかへつて

わさはひありなむと思ひて逃さるになを父

の慈悲捨かたく思ひて窮子のこゝくにいやし

きさまなるもの二人をしたてつかはして漸に誘

らへすゝめてゐてかへりぬさる程に長者の門辺

に侍りてけからはしきわさをなしてあたひ

をとりて侍りかくてちかつくまゝに長子の

家内のことまでも立入てつみには金銀珠寶

にいたるまでをし入侍りしされはその後は

誠には我子なりわれは汝が父なりと昔の

契りをあらはしをはりぬと也これを法にて

申せは親子といふは昔の大乗を聞侍りて

仏も衆生も同一仏性なりと心えたる事也

後にはその心つせはてゝあしきみちに入侍る

(八・ウ)

(九・オ)

を父の國を逃て出るといへり長者のたまゝ（九・ウ）
給へるにおそれをなすとは衆生の機分小
乗をこゝろさしてかくて仏乘の法におよひ
侍らすしかれば長者又方便して賤をちかつ
けて心よくとゝのへる後に方便すなはち眞
実をあらはすを無上の宝珠もとめさるに
をのつからえたりと説なり

【校異】

(八・オ) 読・ナシ「内」、五十年・五十一「内」、尊者又我・

尊者の「内」、其「内」「承」(八・ウ) そむけて・そむ

き「内」、住居し・住「内」、父も・父も又「内」、みたりし

に・くたりしに「内」、やすらいする処は・やすらははうる所は

「内」、わさはひありなむ・わさわひありなん「内」、こゝくに・

こゝとく「内」、なる・したる「内」、したてつかはして・した

ひつかわして「内」、誘らへ・こしらへ「内」、(九・オ)

門辺・門のほとり「内」、とりて侍り・とれり「内」、されは・

さて「内」、誠には・まことは「内」、をはりぬ・おわりぬ

「内」、昔の・昔この「内」、大乗を聞侍りて・大乗妙法を聞奉

りて「内」、同一・「内」、心えたる事也・意得しと也「内」、

(九・ウ) 長者たまゝ・長者逢「内」、小乗・乗「内」、

かくて・かつて「内」、およひ侍らす・及へからす「内」、賤・

いやしき「内」、眞実を・眞実と「内」、無上の宝珠もとめさ

るにをのつからえたりと・無上宝聚不求自得したりとは「内」

前大僧正覚忠

かへりても入そわつらぶ槓の戸をまよひ出にし心ならひに

【校異】

(九・ウ) 集付ナシ・千載「内」、まよひ・まとひ「承」

慶政上人

136 年ふれと行交もしらぬたらちねのこはいかにして尋あひ剣

(一〇・オ)

【校異】 (九・ウ) 慶政上人・前参議経盛「承」、(一〇・オ) 年ふれと、年ふとも「内」、たらちねの・たらちねよ「承」、剣・みん「内」

藤原元秀

137 をろかにてまよひはてにし末にこそやかてまことの道は有けれ

【校異】 (一〇・オ) 元秀・宗秀「内」「承」、をろか・おろか「内」、はてにし・いてにし「承」

後宇多院宰相典侍

138 くもりなく心の塵をはらひてそまよひし程のやみははるけし

上に申し侍るたとへの心をもつて見給ふへし

【校異】 (一〇・オ) くもり・白雲「内」、はるけし・はるけき「内」、をまつて・にて「内」
無上宝聚不_レ求 自得_レといふ文をよめる

俊成

139 まよひける心もはるゝ月影にもとめぬ玉や袖にうつりし

【校異】 (一〇・オ) といふ文をよめる・ナシ「内」、俊成・皇太后宮

太夫俊成「内」

前大僧正慈鎮

140 時しあれはもとめぬ人もきてそみる柳桜の春の錦を (一〇・ウ)

【校異】 (一〇・ウ) 時し・時しも「承」、錦を・けしきを「内」

後京極摂政太政大臣

141 舟のうち年つむ人を思ふにももとめてこそは猶えさりしか

うへもなき珠を求_レさるに得たりといふ心あきら

けしす_レの哥おほつかなしもし秦の始皇

の童男_{（どうなん）}女_{（むすめ）}をつかはしてふ死_{（し）}の薬_{（くすり）}を求_{（もと）}しに

つみにえさりきそれにはかはり待るといふ心か

【校異】 (一〇・ウ) 後京極摂政太政大臣・ナシ「承」、年つむ・老にし「承」、珠・宝「内」、男_{（おとこ）}・女_{（むすめ）}・外女_{（けむすめ）}「内」、それにはかり・それには今の窮子_{（きゆうし）}はかはり「内」

止_{（とど）}宿草_{（しゆくそう）}庵_{（あん）}のころを讀_{（よ）}侍_{（ま）}りける

大僧正実超

142 はかなくも心とめけるいにしへのかりそめふしの草の枕に

【校異】 (一〇・ウ) 止_{（とど）}宿_{（しゆく）}・虫宿_{（むしゆく）}「内」、のころを讀_{（よ）}侍_{（ま）}りける・ナシ「内」、大僧正・前大僧正「内」、集付ナシ・続後撰「内」、はかなくも・はかなくそ「内」、枕_{（まくら）}・庵_{（いほ）}「内」

前大僧正慈鎮

143 いかにして都のほかの草の庵にしはしもとまる身と成に劍

草の庵とは窮子_{（きゆうし）}となりし時いやしきしつ

のやをたのしみて父の都をわすれぬるよし也

【校異】 (一〇・オ) しつ_{（しつ）}のや・ナシ「内」、よし也_{（よしや）}・を申也「内」

選子内親王

144 草の庵に年へし程の心には露かゝらんと思ひかけきや

是は又長者_{（ちやうしやう）}の縁_{（えん）}をたゝしてあらゆる財宝_{（さいほう）}を

得て後たちがへりていにしへはかくあらまじとは

おもはさりつるとなり

【校異】 (一一・オ) 集付ナシ・同「内」、長者_{（ちやうしやう）}の・長者と親子の「内」、かくあらまじとは・かゝらまじと「内」、となり・といへるよしなり「内」

浄_{（じやう）}二_{（に）}仏_{（ぶつ）}国_{（こく）}土_{（ど）}の心を讀_{（よ）}侍_{（ま）}りける

前大僧正慈鎮

(一一・ウ)

145 あたにそむ心とゞもにちる花を仏のやとにともの宮つこ

【校異】 (一一・オ) 浄ニ「承」、の心を読侍りける・ナシ「内」、

(一一・ウ) あたにそむ・あたのはな「承」心とゞもに・心を
しめて「承」、ちる花を・詠むれば「承」、和歌ノ注ナシ・心
あらはなり「内」

我等長夜修ワレラヤヤニシヨシウスクワホワ「習空法」の心をよめる

中納言師仲

146 なかき夜もむなしき物としりぬれば早く明ぬる心ちこそすれ

【校異】 (一一・ウ) の心をよめる・ナシ「内」、中納言・前中納言

「内」
仏所ホトケノハケウケモラウルコトヲラスムナシカラテハチス「教一化」得レ道不レ虚 則スレ為ス已得ス報ニレレ仏之ノ
恩ノのころをよみ侍りける

大僧正慈鎮

147 ましていかに憂世にめぐる人の親のむくひをたにも報ひ尽さむ

ほとけの教化ケウワを蒙カケて得道トクタクしぬればをのつか

ら仏の恩オンを報マウし奉るにて侍るといふ文の心 (一一・オ)

なりされは哥カの心はうき世の中のかりの親

の恩オンさへ報マウしかたし況いはんや三界ガイサイの慈父じふの大恩

をやといふ心なり

【校異】 (一一・ウ) 恩オン・思シ「内」、大僧正・前大僧正「内」、憂世・

浮世ウキヨ「内」、尽さむ・尽さん「内」、蒙カケて・かうふりて「内」、
をのつから・おのつから「内」、(一一・オ) されは・さて

「内」、といふ心なり・となり「内」
今得イマエツム「無漏無上大果ムロムシヤウノタイクワ」といふ心を

了然上人

148 尋つる雲より高き山こえて又つへもなき花をみる哉

大果たいくわとは果報くわほうなり法花ほっけにてさどる事をかく

申し侍り

【校異】 (一一・オ) 大ダイ・大「承」、といふ心を・ナシ「内」、高き・

たかく「内」、かく・ナシ「内」
以モテ「一」道声ドウシヤウ「令シム下」一切イツキヤク「聞上」のころを

前大僧正慈鎮

(一一・ウ)

149 松風の声をつたふる萩の葉も鹿のそのにやなひきそめけむ

松風しょうふうを仏音ぶつおんにたとへ萩あきの葉はをは声聞しやうもんに

よせたり昔はほとけ説法の御声を聞いて

われのみさとれりいまは又仏の説法をとき

つたへてもろくの人を利益りやくし侍ると也

【校異】 (一一・オ) のころを・ナシ「内」、(一一・ウ) 慈鎮・慈円

「内」、萩の葉・ことこの葉「承」、けむ・けん「内」、松風を・
松がせを「内」、ほとけ説法のいまは又・ナシ「内」、と
也・ナシ「内」

第三巻薬草喻品

此品ほんを薬草やくそう喻品ゆひんと名つけ侍る事は衆生

の根機こんきしなくなりといへとも人天声聞にんてんしやうもん縁

覺菩薩かくぼさつの五にはすすきこれらを二の木 (一一・オ)

三の草に譬たとへたり昔は草も木もいつれの

所ところより生おひのびてなにもにうるをふといふ

事をしらすいま此経このきやうにしてさとりて見侍

れはたゞ一実相じつさうの大地だいちより出て一味みの雨

につるほへりとしり侍るよしなり

【校異】 (二二・ウ) 侍る・侍ける「内」、しなくなり・しなく

しなくなり「内」、(二三・オ) 二の木三の草に・この三の草に「内」、うるをふといふ事を・うるほさるゝ共「内」、にじて「内」、うるほへり・うるほひてあり「内」、よし・ゆへ「内」

150 諸共に一味の雨はかゝれとも松はみとりに藤はむらさき

此哥は住吉の社にまうて通夜し侍る人の

夢にしめし給ひける普賢菩薩の御哥となむ

【校異】 (二三・オ) 読人ナシ・前大僧正慈円「内」、集付ナシ・新拾遺

「内」、社・杖「内」、し侍る・して侍ける「内」、なむ・なん「内」

僧都源信

151 おなしこと一味の雨の降ぬれば草木も人も仏とそなる(二三・ウ)

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ・続後撰「内」、とそ・とき「内」

をしなへて一味の雨のうるをひに三草二木も枝さしてけり

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ・続千「内」、をしなへて一味の雨のうるをひに・一時にそゝきし雨のうるひつゝ「内」ひとときにそゝきし雨のうるひつゝ「承」

行基大僧正

153 大空の雨はわきてもそゝかねとうるぶ草木はをのかしなく

【校異】 (二三・ウ) 行基大僧正・ナシ「内」僧都源信「承」、集付ナシ・千載「内」、草木・草「内」、をのか・おのか「内」、しなく・さまく「承」

法性寺入道前摂政太政大臣

154 法の雨はあまねくそゝく物なれとうるぶ草木はをのかしなく

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ・風雅「内」、うるぶ・つふる「内」、をのか・おのか「内」

慈覚大師

155 雲しきて降春雨はわかねとも秋のかきねはをのかしなく

【校異】 (二三・ウ) しなく・色く「内」いろ・く「承」

大僧正行尊

156 草木も種はひとつをいかなれば二葉三葉にめくみ初けむ

【校異】 (二三・ウ) 集付ナシ・風雅「内」、けむ・けん「内」

崇徳院御製

157 さまくにちの草木の種はあれとひとつ雨にそめくみ初ぬる

【校異】 (二四・オ) 集付ナシ・玉葉「内」、ぬる・ける「内」

無_レ有_二彼_一愛憎之心のこゝろを讀侍りける

皇太后宮大夫俊成

158 春雨はこのもかのもの草木もわかす緑に染るなりけり

【校異】 (二四・オ) 無_レ有_二侍りける・ナシ「内」、大夫・太夫

「内」、春雨は・春の雨は「内」

前大僧正慈鎮

159 おなし野にわかぬ時雨は染れとも草木の葉も色かはりつゝ

これらの哥いつれも心おなし大地と雨とを実相の妙法にたとへ草木をしなくの衆生に

類し侍り

【校異】 (二四・オ) 前大僧正慈鎮・前大僧正公豪「内」「承」、集付ナシ・続古今「内」、59番歌ト注ノ間ニ一首・権大納言行成

まくの草木の種と思しをうるほす雨は一なりけり「内」、実相の・実相「内」

前久我内大臣

160 二木とも三木共誰かいひをぎしひとつ緑のたけくまの松

(二四・ウ)

これは雨露にはよせねとも一味の法といふ
に一乗ぎょうの法ほうの心こころをもたせ侍り

【校異】 (一四・オ) 前久我内大臣・久我内大臣「内」、(二四・ウ) 緑・
御法「内」、には・に「内」、一味みの法・一みのり「内」

付記 本稿の翻刻については、国文学研究資料館および内閣文庫に御
許可を賜った。ここに深甚の謝意を申し上げる次第である。

(うちの ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程)